



ドキュメンタリー映画『チョコラ!』完成

■ 「思春期」の川を泳ぐ子どもたち 小林茂 監督

9月中旬に開かれた私の地元での「第13回長岡アジア映画祭」のプログラムの中で、『チョコラ!』完成記念上映会を行いました。

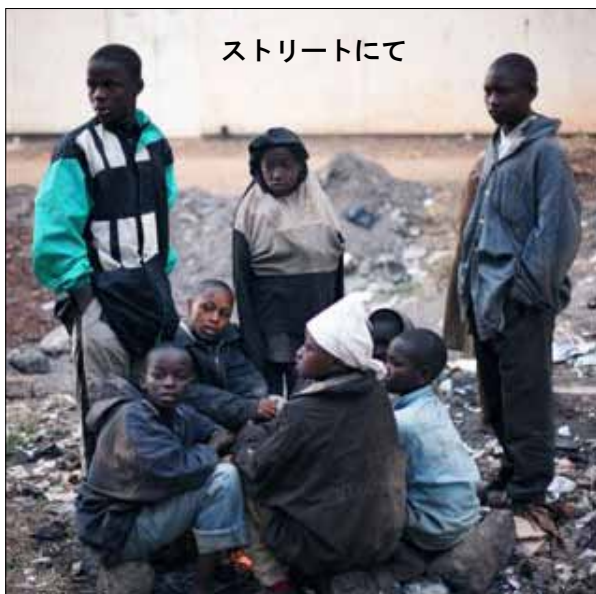
——「なぜ、おせっかいにも、こんな遠くアフリカまで来てカメラを回すのか」。その問いに答えられるものは何もない。グローバリゼーションや経済格差を描く術も力量もない。私は援助者でも教育者でもない。既存の価値観で彼らを断罪する視点をいかに捨てられるか。ただただ子どもたちの日常にカメラを向ける。そこから浮かび上がってくるのは「思春期」の川を泳ぐ子どもたちの哀しい心情である。日本もアフリカも「思春期」に変わりはない。「いのち」を背中にかつぎながら疾走する子ども



小林監督

もたちにいかなる光を感じられるか。それが、腎不全から透析へ移行した時間と並走しながら、この映画を作ってきた私の原動力

である—— (パンフレットより)



ストリートにて

2006年の5か月間の撮影、そして、一年半の編集でした。多くの皆様から製作資金のカンパをいただき、また、通訳や翻訳にケニア人スタッフにもお世話になりました。映画の基盤を作って急逝された佐藤真監督、撮影の吉田泰三(ぞう)さん、編集の秦岳志さん、山崎陽一さん、音楽のマンゴーさん、録音の久保田幸雄さん、字幕のパツパツ(赤松)さん、プロデューサーの矢田部吉彦さん、他多数のみなさん、ありがとう。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

映画は来年初夏の劇場公開をめざしておりますが、詳細は未定です。もう少しお待ちください。また、来年は松下さんのセンター建設のキャンペーンが行われる予定ですが、あわせて上映会が計画されています。

◎映画のお問い合わせ

秦(はた) 070-6483-6376 hata@gurigura.com

小林茂 090-5515-9113 koba-pro@yd6.so-net.ne.jp

■ 絶望ではなく希望が 飯野昭司 (庄内ドキュメンタリー映画友の会)

『チョコラ!』は、私が(勝手に)想像していた映画とは違っていました。製作前の『空腹を忘れるために』という題名の時は、もっと悲惨で暗い内容だと思っていたのです。映画には、子どもたちがシンナーやタバコを吸ったり、食べものを奪うためにケンカをする“現実”も出てきますが、最も心に響いたのは、(映画のチラシにも書かれていた)思春期の川を泳ぐアフリカの子どもたちの姿でした。

ストリート・チルドレンと言え、家族や頼る人もなく路上で暮らさざるを得ないかわいそうな子どもたち…と(これも勝手に)思い込んでいましたが、両親や帰る家があっても、なぜだかわからない気持ちで路上生活を選ぶ子どもたちもいるという事実、思春期の複雑な気持ちは世界のどこでも共通なのだという思いを抱かせてくれました。

それと同時に、ケンカをしながら仲間を思いやる子どもたちの姿や、ストリート・チルドレンに対する周囲の人たちの暖かさも感じられました。もちろん、アフリカのストリート・チルドレンの姿がこの映画ですべて語られるもの

ではなく、ケニアというアフリカの“優等生”ならではの特別な例かもしれませんが、この映画からは絶望ではなく希望が伝わってきます。それにしても、5か月という短期間で、異国の路上に暮らす子どもたちの心にしっかりと入り込み、生き生きとした姿を捉えることができたのは、さすが小林さん（とゾウさん）！と思わずにいられません。

■ 美しい映像からにじみでる少年のこころ

小池彰 世界子ども通信「ブラッサ」代表

丹念に子どもたちを見つめ、追ってゆくことではじめて得られる映像がある。『チョコラ』の中にはそうした映像がちりばめられている。

美しく、忘れることのできない映像もある。冒頭の子どもの水浴びと青空もそうだが、農業を営んでいる実家の庭で、左側で丸まって寝ている犬。中央に二人の妹と弟。その間で食事を取っている猫。右側では鶏が、首を上げている。それはまるで絵画のようだ。

その情景ののち、路上生活をしている少年が、弟を前に抱き、彼を撮ってくれと言う。単純に観ていれば、ただそれだけかもしれない。けれど少年がなぜ弟をカメラの前につれてきて、ネックレスをつけカメラにおさめてくれと頼んだのか。少年の気持ちを考えるとたまらない気持ちとなってしまふ。(映画評より抜粋)

■ 躍動感とユーモア

大山美佐子 編集者

『チョコラ!』、命の躍動感が感じられとてもよかったです。何度か耳にしてはいた「チョコラ」、「拾う」という意味のスワヒリ語だったのですね。街でモノを拾って金に換える生活のことを卑下するようでもあり、しかし実はプライドも多分に含んだ言葉であることが初めて分かりました。HIV ポジティブのルーシーさんが、「こんなに汚くしたら、チョコラになるよ」と息子のマイケル君をたらいに座らせ、見事にゴシゴシと洗っているのも迫力でした。スラムでの苦しい生活、「親子でチョコラか？」と自分でも笑ってましたね。

チョコラたちが体を洗うシーンが何度も出てきましたが、黒い肌に白い石鹸がとてもきれいだと思います。時々挟まれる川での沐浴シーン。チョコラたちは土や埃にまみれながらも、即興の歌にもあったように、魂を洗うがごとく本当に気持ちよさそうに裸になって体を洗っていました。本当は人間はみな、我が身ひとつなんだよなーと改めて発見。

それにしても、撮影者と彼らの意思疎通がままならないのは、さぞ大変だったと思います。しかし、結果としてすごいユーモアを生んでいました。言葉がわからな



いということで、逆に撮影者たちの姿が映像に映しこまれておもしろかった！「お金くれよ」と物乞いをしていても、大人たちからは「カメラで写している奴らにもらえばいいだろう」。チョコラはカメラを一瞥して、こいつらはたかる相手ではないと思ったのか、また視線をそらして……。元々遠慮もないだろうけど、言葉が通じないゆえに本音が聞こえてきておかしかったです。

警戒感あふれる目、抜け目なさそうな目、虚ろな目、好奇心あふれる目、屈託のない目、最後には親密な目……。見ているはずのカメラを通して、観客もチョコラたちの視線を受け止めることになります。少年たちにまた出会いたく、公開の日を心待ちにしています！

■ 想像する過酷な現実

越智敏夫 新潟国際情報大学教授

街中をうろつく子どもたちをすべて固有名詞で呼びつづける小林さんの微細な画像を見ているうちに、彼らの無軌道な行動がしごく当然のように思えてくるから不思議である。彼らの行動を正当化するつもりはないが、批判する気もうせてくる。シンナー中毒の九歳の少年を前にして、私たちはその子自身に対して責任を問うことができるだろうか。彼が路上でシンナーを吸わなければやっていけないような状況をつくった人間のほうこそ批判されるべきではないのか。

ところが本作にはそうした社会構造についての指摘もない。エイズや貧困についての深刻な議論も登場しない。抽象的な理屈をあえて封印し、野宿する子どもたちが汚いミルク缶で炊いたトマトピラフ（これがけっこうおいしそうだったりする）を奪い合う場面をていねいに撮影する。そうした描写によってかえって大きな社会的な問題が私たちにつきつけられる。自分の先入観が具体的な現実描写によって変わっていくのがわかる。全体にただようユーモアのセンスによって非常に「見やすい」作品になってはいるが、背後の過酷な現実には伝わってくる。ドキュメンタリーの王道的手法の勝利ともいえる作品である。(映画評より抜粋)

今年もナイロビマラソンに参加！

昨年に引き続き今年も、ナイロビマラソン（10月26日開催）に「モヨ・チーム」として、チャリティ・ランを企画・参加することになりました。

昨年、「子どもたちと一緒に走りたい、アピールしたい！」という思いで初参加したマラソン大会です。企画としては、参加するモヨのランナーに対して、走った距離に応じて設定した金額を寄付して頂くというものです。昨年は「モヨ通信10号」で、スポンサーとランナーを募集し、「11号」でその結果をご報告しました。それによると「新しい家」の子どもたち、スタッフ、支援者計21名が参加、全員完走しています。

子どもたちの完走も嬉しかったのですが、「モヨの子どもたちのためなら」と自らをスポンサーしてフルを完走してくださった元日本人学校のI先生のゴールの瞬間は今も目に焼きついています。頂いたご寄付の合計は経費を引いて189,176円という結果で、このお金は「子どもたちの家」建設資金の一部としてプールしています。

さて今年は準備が遅れ、締め切りぎりぎりの参加申し込みになってしまいました。ランナーを募集する時間ありません。そこで今回は、モヨのランナーが完走したら、「良く頑張ったね！」のご褒美？に、昨年と同じ金額1キロに対して日本1000円、ケニア500シルのご寄付をお願いできないでしょうか。そのお金は

チャリティ・ラン

完走したランナーの走行距離に対して寄付をお願いします

昨年と同じく「子どもたちの家」建設資金の一部として使わせて頂きます。以下は走者のリストです。

「新しい家」の子どもたち：①パトリック・ブル・10km ②ケヴィン・ワンジョヒ・21km ③ジョセフ・ブグワ・10km ④ジョン・カエ・10km

スタッフ：⑤ナンシー・ワイリム・10km ⑥ヘンリー・ジェンガ・10km ⑦ケネス・ムワンギ・21km ⑧ピウス・ムリミ・21km ⑨松下照美・10km

キャンジャウ小学校関係：⑩ワイリム・ユニス・10km ⑪ギギ・ウィルソン・21km ⑫スティーブン・イルング・21km ⑬オティコ・ラファエル・10km ⑭ジェームス・ムイガイ・21km その他：⑮ピーター・ムワンギ・10km・計15名。

「今年はどうしても21キロに挑戦したい！」とケヴィンを始めとして、21キロへの挑戦者が増えました。どうか皆様のご声援とご協力を心からお願い致します。今後このナイロビマラソンでのチャリティ・ランはモヨの年中行事の一つとして毎年目的を掲げ参加したいと思っています。いつの日か日本の支援者の方々と一緒に走りたいものです。来年10月子どもたちと一緒に走りませんか。

振込先は日本：口座名「モヨ・チルドレン・センターを支える会」代表者：高塚政生※郵便振替口座番号：01660-1-73996（ナイロビマラソン・走者へ或は走者名をお書きください）ケニアの場合：松下にご連絡ください。 松下

日本の思い出

ポビー・M・ムカンギ
MMC ボード・メンバー&
テクニカル・アドバイザー

私は今回の訪日でたくさんのお店と都市を横断しました。印象深かったのは、東京、京都、神戸そして徳島で、東大寺、鹿苑寺や大阪水族館も忘れることができません。また初めての経験だった、「公衆浴場」に入り、「箸」で食事をし、リッチな日本の食事、特に幾夜となく1杯のおいしい「焼酎」か「酒」と共に味わう「寿司」はとても素晴らしいものでした。日本の国花である桜の花を見ることが出来たのも非常に幸運でした。神戸を訪問して、1995年の壊滅的な被害をもたらした地震の後の再建について話を聞いたことは、私の国ケニアが選挙後の破壊の後にもう一度美しく平和な国家を作り上げていくことができるという希望をもたらしました。

しかし、本当の違いは私が会った人々です。皆さんは暖かく歓迎してくれ、そして私を励ましてくれました。多くの方々はMCCの支援者で、その寛大さは人類の普遍性に対する私の信念をより確かなものにしました。皆さんは遠く離れたアフリカの子どもたちの叫びを聞き取り、子どもたちのために自分の持っているものを分けてくれたのです。また私は、経済発展後も日本人が持ち続けている謙虚さと、礼儀正しさにも心を打たれました。

さらに日本でのMCC役員会に出席したことも重大な出来事でした。そのとき私はMCCという組織が成長していることを確認することができました。また、ティカの町の子どもの様子を撮ったドキュメンタリーと一緒に見た支援者ミーティングは忘れられない経験でした。

私は日本でのかけがえのない思い出をずっと大事にします。私にとってすべてのことがレッスンとなることでしょう。そして私が一番心を動かされたのは、東京から奈良までの超特急に乗ったときに（もう一つの初めての経験！）照美さんから学んだことです。彼女は、日本が非常に発展した理由は、可能性が見えないときでさえ人々が努力を続けたからだと言いました。また、「ケニアの若者達は、たとえなにもうまくいかないときでも希望を失わないで試み続けなければなりません。」と彼女は言い足しました。この言葉は私の心に響きました。というのも、私は、自分の国が選挙後の破壊から決して立ち直れないと絶望的な気持ちで日本を旅行していたのです。それこそがまさに私がいつも友人たちに言っていたメッセージでした。そして、私たちの国は今、復興の途上にあるんだと彼らに報告することができるのがとても嬉しいです。私が出会ったすべての素晴らしい方々に、ありがとうございます。どうぞケニアへいらしてください。

「モヨ・チルドレンセンターを訪ねて」

どこまでも広がる大空と、熱気に満ち溢れた人々。ケニアに足を踏み入れたと同時に、生まれて初めて訪れたアフリカの地に胸が高鳴りました。ケニアの人々、生活、文化、環境・・・全てが新しい出会いとの連続でした。8日間という短い滞在ではありましたが、松下さんと日々の行動を共にさせて頂き、濃厚で濃密な驚きと感動の8日間を過ごさせて頂きました。松下さん、スタッフの皆さんに心から感謝申し上げます。有難うございました。一生の思い出に残る大切に貴重な8日間となりました。

今回、アフリカの太陽のような明るさと同居している“闇”の部分を目の当たりにしました。貧困、HIV、レイプ、殺人、民族対立・・・。アジアの発展途上国とは質の違う深刻で悲しい現実が溢れていました。しかし、そのような中で松下さんは10年以上もTHIKAの子供達のために、地道で深く地域に根付いた活動をされていました。モヨの皆さん、そして元気に精一杯生きて

平野 陽、平野 美穂子

いる子供達から人生の情熱と勇気を沢山頂きました。同じ日本人として、そしてこの世に



生を受けた同じ人間として お世話になった方々と松下さんの在り方と活動を心から尊敬しています。これから益々、ケニアの子供達の笑顔が広がるようにモヨの活動をご支援させて頂ければと願っています。

私達二人にとって、入籍10日目にして訪れた今回のケニア滞在。これからの人生における“志”のランプに火を灯してくれた大切な国となりました。

「モヨ・チルドレン・センターを支える会」会員募集

お一人でも多くの方に、一社でも多くの法人にご入会いただき、当センターを支えて頂ければ幸甚です。

		年会費	
		個人会員	法人会員
①正会員	日本	6,000 円	20,000 円
	ウガンダ・ケニア	4,000KSH	13,000KSH
②賛助会員	日本	3,000 円	3,000 円
	ウガンダ・ケニア	2,000KSH	2,000KSH

■経過報告 (2008年10月6日現在)

正会員：日本103名(18名増)・ケニア1名(6名減-5名：日本へ移行、1名：イギリスへ移行)イギリス1名 計105名
賛助会員：日本83名・ケニア0名 計83名
特別会員：日本39名・ケニア2名・計41名
法人会員：5社・グループ4
総会員数：個人229名・法人5社・グループ4

■「支える会」よりお願い

送金なされる場合、郵便振替用紙の通信欄に、会員番号、送金の趣旨(〇〇年会費、無指定寄付、〇〇指定寄付)等を記述して下さい。皆様からのご協力を心よりお願い致します。

■「支える会」会費/寄付受付先

口座名：モヨ・チルドレン・センターを支える会
代表者：高塚政生※郵便振替口座番号：01660-1-73996

■お知らせ

ケニアがリアルタイムで伝わる松下照美のブログ更新中です。HPからアクセスしてください。http://moyo.jp/

カンガ

ケニア・ア・ラ・カルト⑫

ケニアやタンザニアの女性が愛用している布をカンガと呼びます。アフリカ的な柄がプリントされていて、中央の下部分にはスワヒリ語の言葉が書いてあります。それは、ことわざだったり、主義主張だったりします。例えば「Elimu haina mwisho: 教育に終わりはない」など。

通常同じ絵柄の2枚セットで売られていて、1枚をショールに1枚を腰に巻きつけたりします。ナイロビではあまり見かけなくなりましたが、地方のママ達はまだまだ大活用です。古くなったカンガはエプロンや赤ちゃん用の背負いひもとして使います。

最近、この鮮やかなカンガでブラウスやワンピースを楽しむ外国人が増えてきました。 高橋

モヨ・チルドレン・センターの歩み

1997年11月/ケニア政府大統領府 NGO ビューロー・インターナショナル NGO 登録の申請書類提出。
1999年9月/ケニア政府より国際 NGO として「モヨ・ホーム」正式に認可・登録される。
2000年10月/ティカにて、本格的に活動開始。
2001年5月/「モヨ・ホーム」から「モヨ・チルドレン・センター」に改名。
2004年4月/「モヨ・チルドレン・センターを支える会」発足。

編集後記

◎今年こそ3回発行を目指していたのに、長のご無沙汰をしてしまいました。12月に「13号」を発行する予定ですので、ご勘弁を。(テル)

◎雨季と乾季の区別がなくなってきたナイロビ。寒い日が多すぎます。(優香)

◎今春訪日したボビーが、ケニアの将来の一つの姿を日本に見出し励まされたという文を読んで心を打たれました。(英)

モヨ・チルドレン・センター●ケニア政府 NGO 局登録番号：OP.218/051/97223/1006
P.O.BOX 2712 THIKA KENYA TEL：254(ケニアの国際番号)-020-2121356 E-MAIL：moyo@africaonline.co.ke
モヨ・チルドレン・センターを支える会●〒799-0702 愛媛県四国中央市土居町小林 1785-1 高塚政生方
TEL/FAX：0896-74-7920 携帯電話：090-11715632 E-MAIL：tmasao@d1.dion.ne.jp

■これまでのモヨ・チルドレン・センター日本支部は「モヨ・チルドレン・センターを支える会神奈川支部」になりました。連絡先はこれまで通り 〒211-0011 神奈川県川崎市中原区下沼部 1916 青木康子：TEL/FAX：044-433-3447